

山岳に存在するジオパーク資源の価値とその展開における課題 ー糸魚川ユネスコ世界ジオパークを例にしてー

竹之内 耕 (フォッサマグナミュージアム)

1. “後背地”としての山岳の価値と役割

糸魚川ジオパークのような山岳が大部分を占める地域では、斜面災害や洪水などは山岳側からもたらされるし、古い地質体が露出する山岳地域は、平地では知ることのできない、大地の過去の成り立ちを教えてくれる。また、気候変動の記録である氷河地形や氷期の遺存種である高山植物もある。さらに、鉱山や森林の開発、山岳信仰も山岳から始まった。このように山岳は、生活の舞台である平地から見ると、さまざまな視点で“後背地”であり、“後背地”の価値に加えて、両者の関連価値も合わせて考察していくべきであろう。

2. 山岳の価値の掘り起こしと保全・活用

以下に山岳地域のジオパーク資源といくつかの活動例を紹介する。【地質】日本列島形成を含むプレート収束域の諸現象を示す地質体の研究を進めている。【断層と山岳】飛騨山脈（中部山岳国立公園）と頸城山塊（妙高戸隠連山国立公園）が糸魚川ー静岡構造線（天然記念物）を境に対峙し、飛騨山脈には山崎直方によって最初に確認された氷河地形がある。【カルスト地形】縦型洞窟から湧き上がる冷気によって生育する高山植物の見学ツアーが継続されている。【活火山】常時観測対象である焼山の調査・防災活動を継続している。【高山植物】飛騨山脈の稜線に沿って、白馬連山高山植物帯（特別天然記念物）がある。【鉱山開発】江戸時代後期～大正時代にかけて採掘された蓮華鉱山跡がある。大正時代には立山信仰の元神職、佐伯宗則が開発の指揮をとった。【山岳信仰】海谷山塊は山岳信仰の対象となり、山麓の寺院には立山曼荼羅が残る。【登山史】1894（明治27）年に英国人宣教師、ウォルター・ウェストンが蓮華鉱山経由で白馬岳に登山した。また地元の山岳会によってつくられた日本海と飛騨山脈を結ぶ登山道がある。【ヒスイ文化】山岳地域の蛇紋岩に含まれたヒスイ（天然記念物）は、土石流によって海岸へ運ばれた。ヒスイ文化を生んだ遺跡群が整備されている（史跡）。【東西文化】飛騨山脈が日本海に落ち込む断崖（名勝）の周辺を境に、言語や年取り魚など東西文化の相違がある。【地すべり】とくに蛇紋岩の地すべりが発生しやすく、河川の白濁が生じることがある。【伝説】特徴的な山岳を舞台に、出雲の大国主命と地元の神との伝説が残る。【盆栽】山岳で生育した、「盆栽の王様」として知られるミヤマビャクシン（真柏）を活用したツアーが試みられている。

3. 今後の課題

(1)山岳に関わる総合知の形成

上述したようなジオパーク資源は、それぞれ異分野の価値としての段階にとどまっている。専門家、ガイド、地域の人々が参加することによって、ジオパークツアーに役立つ、大地と自然と人との総合的な物語をつくっていく必要がある。また、新たな価値を付加し、新たな総合知を得るために、異分野の専門家による総合研究を進めていくことが求められている。

(2)見学ルートの維持と整備

山岳地域を見学するルート、とくに登山道の維持と整備が課題である。地元山岳会の高齢化と会員減少、登山人口の減少などが要因としてあげられる。ジオパーク運営に関わる団体の連携・協力の仕組みがすでにあるので、糸魚川側の価値を結び付け、魅力の宣伝を具体的に展開し、登山を楽しむ人口拡大と整備を担う人々の育成が急務である。